



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail: daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3マツイ・ビル 201 TEL: 06-6354-3011

## 「われら高年期探検隊 4 ジャイナ教は古いか？」

急いでドーラヴィーラ遺跡に行くことにしよう。

ムンバイ空港からブジュに着いたとき暗くなりかけていた。ブジュはパキスタン国境に近い街である。

朝8時に出発、東に2時間ほど向かったところで民族衣装を纏った村人に会った。田舎の人は写真撮影を嫌うことがあるので注意が必要だが、カメラを向けると快く応じてくれた。彼は近くの牛舎で働いている。案内するというので、のこのこついていった。インドの特徴的なコブ牛はいなかったが、輸入された交配種の牛がいた。

あちらからジャイナ教の老尼僧二人がやってきた。わが輩は牛より尼僧に興味がある。これまでの経験からすると、尼僧は極度にカメラを嫌う。遠方からでも叱られたことがある。ゆっくりカメラを向けると、なんとポーズまで取ってくれるではないか。阿弥陀如来の右手のように手のひらを開いてわが輩に向けるポーズである。この施無畏印（せむいゐん）は、「恐れなくてもよい」という意味である。

写真を撮っても良いという意味表明なのか、それとも戒律に定められた正式なポーズなのか不明だが、とにかくシャッターを押した。

近くにジャイナ教寺院があるので寄っていけと言う。5キロほどだが、方向が違う。  
(さて、どうしたもんじゃろなあ)

考えることもない。寄り道はわれ高年期探検隊の得意とするところである。これこそが旅の醍醐味である。

それにドクター隊員が、わが輩に耳打ちしていた。

「大魔王よ。どこか途中にジャイナ教の寺院に寄れませんかね」

事前に調べたが、行程中にジャイナ教関連の聖地施設はなかった。わが輩にしてみれば願ったり叶ったりである。

ジャイナ教はブッダと同時代である。仏教は、右でもなく左でもない「中道」だが、ジャイナ教は、戒律が厳しく「苦行」を旨としている。

ジャイナ教には二派ある。裸形派と白衣派である。彼ら尼僧は白衣派の修行者である。かれら尼僧がどの派に所属するか聞きそびれた。

立派な門をくぐるとジャイナ教寺院があった。広々とした敷地には、人影がまばらで数名の女性た

ちがいただけであった。上品な婦人に声をかけてみた。

彼女はムンバイに住んでいて、たった一日のお祈りのためにやってきた。われ等と同じくムンバイからブジュまで航路で、そして陸路を車でやって来た。

(金持ち! そんなに靈験あらたかなの?)

きらびやかな寺院には第 12 祖ヴァースプージャが祀られている。特に注目したのは壁面にヨーガのポーズの絵が描かれていたことである。これは珍しいことである。

寺院裏手には 600 棟のバンガローが建設されている。一棟に一家族まるまる泊まれるような立派なバンガローである。ジャイナ教徒は人口の 0.4% である。しかも、聖地でもないこんな田舎の村に 600 棟も必要なのだろうか。

実はこの施設は古いものではない。2004 年にムンバイのジャイナ教協会マンファラー・ユヴァック・マンダルの莫大な寄進によって建設されたものである。

御存知のように生き物を殺すことができないので、ジャイナ教徒は農耕ができない。職業としては商業が中心になる。彼らはこの村出身で都会にでて財をなした人たちである。

お祭りのときはバンガローが満室になるという。ここは郷土愛とジャイナ教徒の結束の聖地なのである。

ジャイナ教徒といえば徹底したアヒンサー (非暴力) である。

ジャイナ教は現代にマッチしない古い教えだろうか。わが身にかえて再考してみよう。

わが輩は激しい暴力への衝動にかられたことがある。

五歳のときわが家は山陰の山奥から出てきた。都会っ子に負けたくないが無意識に思っていたふしがある。しばしばケンカをしていた。相手はいつも目上の男の子である。あるとき五歳上の男の子とケンカになった。当然のごとく負けた。八百屋の籠に包丁があったので、泣きながらそれを握って刃向っていった。あわてた店主が包丁を取り上げた。店主がオフクロに告げ口して叱られた。

もう一つの衝動は、中学三年の時のことである。O という不良生徒がいて、クラスの一人一人を脅しと暴力で屈服させていった。腕相撲をしたらわが輩が (あるテクニックを用いて) 勝った。それでわが輩への攻撃は後回しになった。とうとうわが輩の番が回ってきた。校舎の裏に連れて行こうとするのを拒否したら、後ろから頭を殴られた。そのとき激しい暴力への衝動が沸き起こった。教室には椅子があった。それを振りかざして後ろからぶちのめす衝動である。

今でもその瞬間がフラッシュ・バックすることがある。振り下ろさなかった悔しさと、振り下ろさなくて良かったという感情が交差する。

怒りの衝動はだれにでもある。包丁や武器 (椅子) がそこにあれば使うかもしれない。いや、使ってしまうだろう。人間と言うものはそのようなものである。自衛のための拳銃でも、使ってしまうのが人間というものだ。

感情を (シビリアン) コントロールすれば使わないという人もいるが、感情はもろいものである。それなら、まず持ち物 (武器) を棄てたらよい。ついでに衣服 (軍服) を棄てよう。全裸あるいはそれに準じた質素な白衣 (服装) にしよう、と考えたのはジャイナ教だと、わが輩は勝手に思っているが、読者諸氏よ。どうだろうか。